

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：31307

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12940

研究課題名(和文)現代男性の生活マネジメントに関する基礎的研究

研究課題名(英文)Research upon the life management by men in contemporary Japanese society

研究代表者

木村 嘉代子(藤田)(Kimura (Fujita), Kayoko)

宮城学院女子大学・生活科学部・准教授

研究者番号：90795915

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文):本研究は日本における父親・男性の家事・育児遂行が少ないことへの問題意識から、男性たちの家事・育児の実態と経験について問う。研究手法はアンケート調査とインタビュー調査である。どちらも宮城県に限られるデータではあるが、地域的な特徴を見出すことができた。共働きが中心となったアンケートでは男性の取り組みが多く見られ、高齢者の聞き取りでは経験や幼少期の手伝いなどライフコース特有の経験を抽出することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これらの調査や研究からは、調査対象となった宮城県に住む男性たちが世代を問わず比較的多くの家事や育児をしていることがわかった。アンケートでは家事については妻年齢の上昇や妻収入が低下すると男性の行為量が増加するというニーズに応じた家事遂行が見られ、従来の研究とは異なる傾向が把握できた。インタビュー調査からは、高齢男性たちの生活経験を掘り下げることができ、負荷の高い手伝いを幼少期にしていることなどから男性たちの高い家事力に記憶された家事スキルが貢献しているものと考えられた。いずれにしても地域的な特徴と考えられ、男性のケア役割を考える際、経験、地域性といった視点の重要性を見いだせた点が研究成果である。

研究成果の概要(英文): Japanese men do the little housework and childcare. I researched men in the Miyagi prefecture about how they performed and experienced housework and childcare. The research methods are questionnaire surveys and interview surveys.

Both data are limited to Miyagi prefecture, but we were able to find regional characteristics. In the questionnaire centered on double-income, many men's efforts were seen, and in the interviews with the elderly, it was possible to extract experiences peculiar to the life course such as help in childhood.

研究分野: ジェンダー論 家族社会学

キーワード: ケア 男性の家事 ライフコース

1. 研究開始当初の背景

現在、わが国は少子高齢社会となっている。子どもが減少する背景には、性別役割分業意識が強く、父親の家事育児時間が少なく、母親の子育ての負担が重いという子育て環境の問題が挙げられる。育児する父親がクローズアップされ、育休を取得する男性がかつてより増えたとはいえ、日本の父親の家事育児時間が少ないことは海外と比較して際立っている。父親の育児に対するかかわりを増やすことは、少子化対策としてだけでなく、ジェンダー平等を進める上でも課題であり続けている。

一方、男性が家事にあまりかかわらないということは、単に子どもを持つ父親の問題だけではない。

少子高齢化は、家族規模の縮小、単身世帯の増加という側面を持っている。これまで日本は、皆婚社会で、家庭には家事を主にする主婦がいて、主婦以外の成員は自ら家事を行わなくても、主婦による相当量の家事によって快適な環境で暮らすことができた。しかし、これからはそのような状況を楽しむ男性は減少していくことが予想される。自らのケアを十分行わないことによって、特に中高年齢層の男性で成人病が増加したり、セルフ・ネグレクト、孤独死という現象が出現したりしている。家事はまさに習慣として長い間そのありようを続けるため、やり方によっては不衛生であったり不健康な環境につながり、それが糖尿病や高血圧といった疾患につながる場合も少なくない。これらの背景にあるのは、男性が衣食住に十分関心を払わず、自分自身をケアする力を十分に身につけていないということである。

本研究においてはこのような問題意識に基づき、男性の家事スキルの生成についてどのような可能性が見られるのかを探索的研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本において男性の家事の能力の低さについて、その要因を学術的に明らかにすることである。特にライフコースのどの時点で家事を習得しやすいか、多世代の男性に対する調査を行うことが本研究の特徴である。男性の家事能力形成に関して、どの時点でテコ入れを行えば習得しやすく、家事能力を向上させられるか、代替案を示すことが第二の目的である。また、本研究は、家族社会学においていまだ十分ではない、父親研究という点においても、また家事育児の分担について、生育家庭や教育歴にさかのぼってその要因の探索を行うといった点でも独自性がある。

申請者は、子育て中の親たちにインタビュー調査を行い、特に共働き家庭の、家事や育児を比較的多く実践している男性が、生育家庭でどのような家事を行っていたか、家事を親から習ったことがあるか、現在父親としてどの程度子どもにかかわっているか、どのような家事をどのくらいやっているか等の聞き取りを行っている。

母親たちは一般に、子どもの時からのジェンダー化されたしつけを受け、また、学校教育のなかで家事を実践的に学び、結婚・出産以降は主たる家事担当者としての責任意識や周囲からの期待により、日々家事育児を担い、これらについての実践的な能力が形成・維持されている。(さらに情報収集などでスキルアップが図られることもある。)一方、父親は、そもそもジェンダー化されたしつけとして、家事を教わる機会が少なく、また1993年の家庭科共修以前は、小学校の家庭科等極めて限られた内容しか学習しておらず、前提となる経験が非常に少ない。しかし一方で、クラブ活動やアルバイト等でいわば業務や役割として課された家事についてはよく身につけているという特徴が見られ、男性と女性では家事スキルを身につけるプロセスがかなり異なっていることがわかった。

本研究では、そのような先行調査の知見を活かしながら、子育て中の男性にだけでなく、多世代にわたる、男性の家事能力の形成におけるポイントやコツなどを明らかにし、ケア能力を身につけ向上を図るための客観的なデータを提示する。

本研究では上記の目的が達成されれば、父親の家事育児へのかかわりがどのように増加させられるか、また、中高年齢層の男性たちが、自らの日常生活を健康的なものに再構築するためにはどのような、機会やサポートがあれば可能なのか、男性の家事学習の機会や、家事サポートに関して若干の政策的な提案が可能になると考える。

3. 研究の方法

本研究では、日本において男性の家事育児時間が極めて短いことからその要因を明らかにするため、実態把握のためのアンケート調査と、インタビュー調査を実施した。

アンケート調査は宮城県に事業所を持つ企業や自治体の労働組合を通じて、700部配布の401部回収し、共働きの世帯を中心とした宮城県の男性の家事育児の遂行状況についての実態を明らかにした。またこの調査によって得られたデータをもとに、重回帰分析を行い、どのような要因によって男性たちは家事量を増やしているかについて検討した。家事についての、一般的な夫婦の家事分担についての分析で見られるような、相対的資源仮説が有意とならず、むしろ妻の年齢、妻の就業がプラスの相関、妻の収入とはマイナスの相関があり、ニーズの高さによって男性の家事量が増えるという、従来の分析には見られない特徴が見られた。育児については妻の就業によって夫の育児が増加する等、既存研究を追認する結果となった。

また、家事や育児をしている(していた)男性に対してインタビュー調査を実施した。対象となった男性は高齢者10名と、30代から40代の男性を4名であり、前者は町内会を経て依頼、後者は機縁法によって調査の協力を得た。このうち高齢期男性調査については、「高齢男性の家事実践とライフコース 仙台市におけるインタビュー調査より」として論文を執筆している。70代から80代の、特に妻と死別やケアが必要となっている男性については家事の自立が見られた。また妻が健在な男性においても比較的多くの家事遂行が見られた。また特に趣味とも言えるような家事の遂行がかなり多く見られた特徴がある。

4. 研究成果

論文としてまとめたものは次の二点である。

・藤田嘉代子「宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因 宮城県調査と他調査の比較から」『研究論文集』132号(25頁-45頁)、2021年。

この論文では、宮城県における男性・父親の家事や育児遂行の状況について調べたアンケートの結果からその規定要因を明らかにした。本調査では平均的な男性の家事育児についての結果より、宮城県男性が比較的多く家事や育児にかかわる実態が明らかになった。

・藤田嘉代子「高齢男性の家事実践とライフコース 仙台市におけるインタビュー調査より」『研究論文集』134号(57頁-75頁)、2022年。

この論文では高齢の男性を対象としてインタビュー調査を行い、高齢男性の家事の実態を明らかにするとともに、どのような生育環境、手伝いなどをしてきたかなどライフコース上の特徴から家事スキルの生成を把握しようとしたものである。思いのほか高齢男性も多く家事をしており、そのきっかけは自身の退職、また自身が退職して妻がパートなどの仕事をしている状態であったことである。妻と死別したり妻ケアとなっている人もそれをきっかけとして主夫となりまた妻や家族を支える家事をする男性となっていた。またこれらの人々は子ども時代においては負荷の高い家事や農作業の手伝いをしていたことがわかった。ライフコースという観点から見ると家事スキルの生成においてはそのような幼少時の環境が大きく作用していることが分かった。しかしこのことと現代の父親たちを比較すると、現代において子どもは手伝いをほとんどしておらずむしろ教育や習い事が重視されるおり、これらの知見は現代の父親に対して直接的なインプリケーションになりえないともいえる。調査対象となった男性の中には特に料理を得意とする男性も見られ家事を苦としないという特徴が地域的なものなのか、今後の課題が与えられたことは有益であった。

これらの調査や研究からは、この地域に住む男性たちが世代を問わず比較的多くの家事や育児をしていることがわかったため、研究を当初考えていたような、男性の家事能力の低さがどこから来るものか明らかにするというよりは、家事能力の高さはどこからくるのかを探究するというスタンスとなった。また、アンケートは広い年齢層の男性、インタビューは高齢層が中心だったため、どのライフステージが特に家事に取り組んでいるのかということについても、全般的に良く行われる傾向を知るにとどまり、特定のライフステージに関わることなのかどうかの検証できなかった。これらは今後の課題となるだろう。またインタビュー調査においても若い世代に対しては数例に留まり、さらに事例を多くしてその背後にあるもの、若い世代における家事育児遂行の地域的な特徴についてもさらに探求していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤田嘉代子	4. 巻 132
2. 論文標題 宮城県における男性の家事・育児遂行の特徴と規定要因 宮城県調査と他調査の比較から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学研究論文集（文化学会）	6. 最初と最後の頁 25-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤田嘉代子	4. 巻 134
2. 論文標題 高齢男性の家事実践とライフコース—仙台市におけるインタビュー調査より	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 宮城学院女子大学研究論文集（文化学会）	6. 最初と最後の頁 57-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤田嘉代子
2. 発表標題 高齢男性の家事実践とライフコース—仙台市におけるインタビュー調査より
3. 学会等名 日本家族社会学学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

RESEARCHMAP 藤田嘉代子
https://researchmap.jp/fujitak_miyagi/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------